Welcome to Library ようこそ図書館へ

中央図書館 ☎23-4946（よくよむ）
赤羽根図書館 ☎45-3426
渥美図書館 ☎33-1114

図書館HP

ホットニュース Hot News

◎目に優しい大活字本

「大活字本」とは、低視力や高齢者の方でも読みやすいように、原本の内容はそのままに、大きな文字で組み直した本です。日本の名作文学の他に、歴史やミステリー小説、エッセイや最近のベストセラー本などがあります。

大活字本の多くは、NPO法人たはら広場が運営するリサイクルブックオフィスの売り上げの一部から、毎年20～30冊寄贈されています。

棚の内容も少しずつ変わっていますので、新しく入った本を探してみるのもオススメです。

◀大活字本の棚にある本

▲大活字本の棚

オススメの本

ハダカデバネズミのひみつ
岡ノ谷一夫/監修
エクスナレッジ

見た目そのまんまの名前、アリのような社会性、老化しない体…。キモかわいい姿に秘められた特殊な生態を大解剖します。

エジソン
トーベン・クールマン/著
ブロンズ新社

海に沈んだ先祖の宝を探すため、小さなネズミはゼロから潜水艦作りに挑む。精緻な挿画が魅力的な絵本。

History Inquiry Club 歴史探訪クラブ 其の223

文化財課（博物館） ☎22-1720
吉胡貝塚資料館 ☎22-8060
渥美郷土資料館 ☎33-1127

博物館HP　博物館インスタグラム

田原・福江の町と水の話

渥美半島は大きな川がないため、豊川用水が開通するまでは人々は飲み水や農業用水の確保に苦しみました。田原出身の児童文学作家・山田もとの小説『水の歌』では、同氏の母をモデルとする女性が、嫁ぎ先の大草地区で水を得るために多くの苦労を重ねる情景が描かれています。

その一方で、比較的水に恵まれた地域もありました。例えば、江戸時代には町が形成されていた田原と福江です。どちらも山から流れる地下水が砂や小石の土壌の下を走っていたことから、井戸から水を得られました。田原の松下駐車場近くにあった井戸からは、約3ヘクタールもの田んぼを潤すことができる水が出たそうです。

水質も良く、田原・福江のどちらでもくみ上げた水を酒造りに使用していたことがありました。福江公園は、明治時代から昭和半ばにかけて、お酒を醸造する工場があった場所です。セントファーレの南側にも昔、「亀井戸」と呼ばれる井戸があり、茶道に使えるようなきれいな水が出ました。田原と福江に町ができたのは、水質の良い水が確保できたことが大きな要素の一つだったかもしれません。

井戸の水に頼る生活は、1950年代後半から始まる上水道の整備によって終わりを告げました。現在、渥美半島の飲み水のほとんどは、奥三河から豊川用水で来ています。井戸はだいぶ減りましたが、どの地区でも所々に残っており、往時を感じさせてくれます。

なお、田原市博物館では、5月22日（日）までテーマ展ふるさとの歴史「水と海」を開催しています。水と海にちなんだ地域の資料を展示していますので、ぜひお越しください。

（学芸員　木村洋介）

▲現在の福江公園にあった福井造酒場（『渥美郡勢総覧（1935年刊）』より。